

三井のリフォーム住生活研究所 所長 西田 恭子

大学講義のアンケートから

前期の大学の授業「住まいと健康」「住宅リフォーム計画」も終わり、学生への採点も仕上げた頃、大学から授業に関するアンケート結果が送られてくる。

それぞれの授業の後半で内容に関するアンケートを行い、「学生による授業評価を取りまとめたものだ。採点と違い、これは評価するのは教師ではなく学生だ。目的は教師の今後の授業改善の参考にといいことだが、どうもこれをもらうまでは授業が終了していないようで落ち着かない。

評価項目は、例えば「各回の授業のねらいは明確だったか」「学問的興味が起きたてられたか」などと授業内容に関わるものが多いのだが、なかには「教員は静かな環境で授業できるよ努力していたか」「教員は授業にたいする準備は十分であったか」というような項目もある。

大学によって違いがあると思うが、評価は一六項目に及び、他の先生の授業と自分の授業の平均が、評価リーダーチャートとして円グラフで並べて表記されて

くる。全体授業平均に比べて自分の授業が、高い評価か低い評価かがひと目でわかるグラフだ。

なんで学生に評価されなければいけないのか！ 評価するのはこちらだろうか！ など、声に出して言う訳にはいかない。とにかく学生はそう感じているのだと、私は真摯に思うことになっている。

なかには「嫌ですよね〜」という先生もいる。また「全く無視、気にしない！」という先生もいる。その先生は平均的に良い授業がよいとは考えていないのかも。授業内容は分かりやすかった」という項目を「平易に簡単だった」と捉えたならば、授業としてはどうだろうか？ 難解で一回の受講では到達感を持ってない授業があってもいいと思うし、個性的で、極端に高い評価と低い評価が入り交じっている授業が、興味深い授業なのかもしれない。オールラウンドプレイヤーがいいのかを踏まえ、とにかく学生の意見は大事だ。私のグラフはというと、どの項目もほぼ平均より少し上という特徴のないもの

だ。自由記述では「講義は実生活がヒントになるので楽しい」「デザインと機能を両立し、人との関係を良好にするリフォーム設計を、いろいろな視点から知ることができ将来に役立つことばかり」などと書いてくれるのは嬉しいのだが、人数の多い授業は一方通行になりやすく、今後さらにメリハリをつけた授業をしたいものだと思っ

ている。企業でもアンケートを実施する。リフォームセミナーの後に、来場者にお願ひして行うアンケートも今後の参考となる大事なものだ。これを分析に使うのか評価に使うのか注意を払って扱っている。また人事制度上でも社員へのアンケートがあるが、その中上司に対してどう感じているかの項目もある。部下が上司を評価することがありえるように、学生が教師を評価する機会もあるのだ。

何においても、どちらがどちらを評価するという一方通行ではなく、お互いがお互いをフェアに確認し合うことが大事なのだと思う。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。日本建築家協会正会員。